東北大学機関リポジトリ
TOUR
Tohoku University Repository

韓国人大学生の日本人イメージに関する社会心理学的研究

著者	OH JEONGBAE
号	19
学位授与番号	272
URL	http://hdl.handle.net/10097/37067

OH JEONG BAE
呉 正 培

学位の種類	博　士(文　学)
学位記番号	文博第　272　号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 言語科学専攻
学位論文題目	**韓国人大学生の日本人イメージに関する社会心理学的研究** **—日本語学習の影響を中心に—**
論文審査委員	(主査) 教授　鈴木淳子　　教授　才田いずみ 教授　大渕憲一 准教授　名嶋義直 准教授　助川泰彦 講師　田中重人

論文内容の要旨

目次

第1章　序論
1.1　はじめに
1.2　研究の目的
1.3　従来の対日イメージ研究の概観
1.4　本研究の位置付け
1.5　本論文の構成

第2章　予備的研究：量的調査と質的調査
2.1　予備的研究1：量的調査
2.2　予備的研究2：質的調査
2.3　要約

第3章　日本人イメージの内容

3.1　本調査の概要：質問紙調査
3.2　日本人イメージのカテゴリー化
3.3　日本人イメージの内容分析
3.4　日本人イメージの内容別出現頻度
3.5　考察
3.6　要約

第4章　日本人イメージの形成：影響要因
4.1　内省的分析
4.2　統計的分析
4.3　考察
4.4　要約

第5章　日本人イメージの形成：日本語学習の影響
5.1　学習者と非学習者の比較
5.2　学習者間の比較
5.3　考察
5.4　要約

第6章　日本人イメージの形成：因果モデル
6.1　日本人イメージの再分類
6.2　日本人イメージへの影響要因：ロジスティック回帰分析による因果モデル
6.3　考察
6.4　要約

第7章　結論
7.1　まとめ
7.2　結論：日本人イメージの実態と形成メカニズム
7.3　今後の課題と展望
7.4　今後の外国人イメージ研究への提言

第1章　序論

グローバル化の進展とともに外国人間の直接的な接触が大いに増えている今日、外国人イメージ研究にも「個人のもつ外国人集団に対するイメージが当該外国人との対人コミュニケーションにどう影響するか」という視点が求められる。

本研究は、韓日間の人的交流が急増している現状を踏まえて、韓国人がもっている日本人という集団に対するイメージが先入観として日本人との対人コミュニケーションを阻害しうる側面に注目し、韓国人大学生の日本人イメージの実態とその形成メカニズムを検討するものである。本研究の具体的な目的は次の3点である。

(1) 韓国人大学生が日本人についてどのようなイメージを抱いているのかを詳細に記述すること。

(2) 韓国人大学生の日本人イメージが形成されるメカニズムを検討すること。
(3) 日本語学習が日本人イメージにどう影響しているのかを探ること。

従来の対日イメージ研究と異なる本研究の特徴としては、次の３つが挙げられる。

(1) ミクロ的な観点からイメージの内容と形成メカニズムに関する具体的な記述を試みている。

従来の研究は、どのようなイメージなのかよりも、肯定的なイメージなのか否定的なイメージなのかを記述の中心としていた。本研究は、回答者の自由記述をもとに日本人イメージの具体的な内容を記述している。イメージへの影響要因については、従来の研究がイメージ全般への影響要因のみを取り上げているのに対し、本研究は各イメージの形成過程に関する具体的な情報を提供している。また、日本語学習の影響については、従来の研究では学習者と非学習者の日本人に対する好感度の違いを示すことにとどまっているが、本研究では学習者と非学習者の比較のみならず、学習者間（日本語能力別、日本語学習歴別）の比較も加えている。学習者のイメージにみられる内容的特徴を明らかにした上で、日本語学習がイメージの形成にどう影響するのかを検討している。

(2) 質的調査（面接法）と量的調査（質問紙法）の両方を用いて日本人イメージの全体像にアプローチしている。

本研究では、イメージの全体像をより正確に捉えるために、従来の研究で多く用いられているSD法ではなく、内容に関する大規模な質的調査（自由記述式の質問紙法）を行い、回答者の自由記述からイメージを導き出している。影響要因についても、従来の研究では、イメージの形成や変化に関わる要因を探る質的調査はほとんど行われていない。本研究では、影響要因に関する多様なレベルの情報を収集するために、本調査に先立ってそれぞれ異なる方法で２回の予備的研究（量的調査と質的調査）を行った。そして、予備的研究の結果から作成した独自の形成要因リストを用いて再度量的調査（多肢選択式の質問紙法）を行い、イメージへの影響要因を多角的に検討している。

(3) 対人コミュニケーションの観点から日本人イメージが日本人との対人コミュニケーションに及ぼす否定的な影響に注目している。

従来の対日イメージ研究の多くは、外国で形成されている歪められたイメージ、特に否定的な国民感情が、日本に対する誤解や偏見を招き、外国と日本との関係を悪化しかねないことに問題意識をもっていた。これに対して、本研究は、外国人のもつ「日本人はこうである」といったイメージが、実際の日本人との接触において先入観として働き、日本人とのコミュニケーションを阻害しうる側面に注目している。日本人イメージの実態とその形成メカニズムを明らかにすることにより、外国人と日本人の対人コミュニケーションにおいて生じうる認識のギャップに関する情報の提供を試みている。

第２章　予備的研究：量的調査と質的調査

本研究は、予備的研究としての量的調査と質的調査、そして本調査の３つの調査から成り立っている。第２章では、本調査に先立って行った予備的研究１（ソウルの大学生429名を対象とした質問紙調査）と予備的研究２（ソウルの大学生17名を対象とした面接調査）について述べた。予備的研究の主な結果は以下の通りである。

(1) 日本人イメージの内容

予備的研究１では、回答者のイメージ（52項目）の評定結果に対して因子分析を行い、「消極的」「利己的」「用意周到的」「配慮的」「集団的」「個性的」といった６つの構成因子を抽出した。予備的研究２では、PAC分析の自由連想およびインフォーマントによる解釈を用いて、「独自的」「二面的」「用意周到的」「利己的」「性に開放的」「配慮的」という６つのイメージを見出した。予備的研究からは、先行研究でほとん

ど取り上げられなかったイメージ(「二面的」「性に開放的」など)の存在が示唆された。この結果を受けて、本調査では従来検討されなかった新しいイメージを考慮し、自由記述式の内容調査を行うことにした。

(2) 日本人イメージに影響を与える要因

予備的研究1では、重回帰分析の結果から日本人イメージへの影響要因として韓国のマスメディア、直接経験(日本人との接触、滞日経験)、統合的志向(日本文化や日本人への関心)、性別の4つを導き出した。予備的研究2では、イメージの形成過程について多様な事例を検討し、影響要因に関する具体的な情報を収集した。このような予備的研究の成果は、本調査の質問紙の内容(形成要因リスト)に反映されている。

(3) 日本語学習の影響

予備的研究1では、学習者と非学習者の日本人イメージを比較することにより、非学習者に比べて「利己的」「用意周到的」「集団的」イメージが弱く、「配慮的」イメージが強いという学習者の特徴を明らかにし、日本語学習が日本人イメージに影響している可能性を示した。予備的研究2では、学習経験をもつインフォーマントの回答より、日本語学習が日本人イメージに与える影響には、日本語の授業による直接的な影響と、日本語の上達に伴う環境の変化(日本人との接触の増加、対日情報源の多様化)がもたらす間接的な影響があることを見出した。これらの結果を受けて、本調査では日本語学習を重要な影響要因として取り上げ、他の影響要因を媒介とした間接的な影響も分析の対象としている。

第3章　日本人イメージの内容

本調査は、質問紙法を用いて韓国の3地域(ソウル、釜山、大田)の大学生を対象に実施した(有効回答者527名)。第3章では、ボトムアップ式の内容分析を用いて、回答者の自由記述から日本人イメージ23カテゴリーを導き出し、回答者の記述内容をもとに23カテゴリーの意味を分析した。その後、23カテゴリーの出現頻度から韓国人大学生の多くが抱いているイメージの内容を検討した。

回答者の自由記述から見出した23カテゴリーのイメージにおいては、次の2点の内容的特徴がみられた。第1は、非常に細分化していることである。類似した意味を表していると思われる「ずるい、日和見主義」と「利己的、計算的」、「個性が強い、独特」と「創意に富む、独創的」などがそれぞれ別のカテゴリーとして現われ、その出現頻度も異なっていた。第2は、相反する内容が出現していることである。親和性の高さを示すイメージ(「親切、やさしい」)と低さを示すイメージ(「親しみにくい、冷たい」)、個人重視のイメージ(「個人主義的、独立的」)と集団重視のイメージ(「集団的、集団意識が強い」)などがともに存在していた。これらの結果より、韓国人大学生は日本人に対してかなり具体的でかつ複合的なイメージを抱いていることが明らかになった。日本人イメージの具体性と複合性を示した本研究の結果は、日本人イメージの全体像が肯定的か否定的かという単純な分析の枠組みでは正確に捉えきれないことを示唆している。

カテゴリーの内容別出現頻度からは、「二面的、本心がわからない」というイメージが韓国人大学生の間で最も共有されていることが示された。他には「親切、やさしい」「開放的、自由奔放」「几帳面、繊細、緻密」「礼儀正しい、礼儀重視」「個人主義的、独立的」「個性が強い、独特」といったイメージの共有度が比較的高かった。これらのイメージは、韓国人大学生が日本人とコミュニケーションを行う際に先入観として作用しやすい内容といえる。

第3章では、本研究の結果を、本研究と同様に自由記述式の質問紙法を用いてイメージを測定した2つの研究(金・鄭・李ほか、1963;車・崔、1992)の結果と比較することにより、韓国人大学生の日本人

イメージがどう変わってきたのかについても検討した。その結果、60年代と90年代の大学生は、日本人に対して植民地統治を行った侵略者や支配者(「ずるい」「利己的」)、経済発展を成し遂げた先進国の国民(「勤勉」「質素」)としての認識が強いことが見受けられた。これに対して、本調査の対象者となった大学生は、日本人に対して独立した一個人としての認識が強いことが観察された。つまり、韓国人大学生の日本人に対する認識は、日本の国民としての認識からコミュニケーションの相手としての認識へと変わりつつあることが示唆された。

第4章　日本人イメージの形成：影響要因

第4章では、日本人イメージへの影響要因を内省的分析と統計的分析を通して検討した。

(1) 内省的分析からみた日本人イメージの形成要因

韓国人大学生の対日情報源については、韓国のテレビ、学校教育といった既存の情報源に、生の対日情報を提供する日本のメディア(アニメやドラマなど)が加わっていることが明らかになった。

韓国人大学生の日本人イメージ全般の形成要因としては、次の4つが見出された。第1は日本大衆文化である。特に日本のアニメ(漫画を含む)、ドラマ、映画の影響が非常に大きいことが判明した。第2は韓国のテレビである。報道番組が日本紹介番組より日本人イメージの形成に影響していることがうかがえた。第3は教育である。高校までの学校教育と日本語および日本関連の授業を通して獲得した知識が日本人イメージにつながりやすいことが示された。第4は直接経験である。特に友人としての接触経験が日本人イメージの形成において重要な役割を果たしていることが見受けられた。

23カテゴリーの形成要因を個別に分析した結果からは、韓国人大学生の日本人イメージを形成する5つの具体的な要因が導き出された。第1は、日本のドラマとアニメ(漫画を含む)である。ドラマは「礼儀正しい、礼儀重視」「ファッション感覚が優れている、外見を飾る」「さっぱりしている、清潔」というイメージ、アニメは「開放的、自由奔放」「猟奇的、退廃的」「創意に富む、独創的」というイメージとの結びつきが強かった。第2は、韓国のテレビ報道と高校までの学校教育である。「ずるい、日和見主義」「歴史歪曲、過去を反省しない」「残忍、好戦的、暴力的」といったイメージは、テレビ報道と学校教育から形成されやすいことが判明した。第3は、日本人との接触経験と滞日経験である。友人としての接触は「親切、やさしい」「親しみにくい、冷たい」「迷惑をかけることを嫌う、配慮する」というイメージ、日本語教師との接触は「規則遵守、原則重視」というイメージと強い関わりをもっていた。また、「親切、やさしい」「礼儀正しい、礼儀重視」といったイメージは短期間の滞日経験(旅行)、「迷惑をかけることを嫌う、配慮する」「規則遵守、原則重視」といったイメージは長期間の滞日経験(生活)から生まれやすいことが示された。第4は、日本語および日本関連の授業である。授業から得る知識は「二面的、本心がわからない」「気が小さい、消極的、静か」「迷惑をかけることを嫌う、配慮する」というイメージにつながっていた。第5は、ファッション雑誌と韓国にいる日本人の観察である。「個性が強い、独特」「ファッション感覚が優れている、外見を飾る」というイメージは、韓国と日本のファッション雑誌、学校や街で見かける日本人の印象から形成されることが多かった。

内省的分析の結果、日本のメディアからの生の情報と直接経験(日本人との接触、滞日経験)が韓国人大学生の日本人イメージの形成に大きく寄与していることが明らかになった。情報源や形成要因の多様性を示した本研究の結果は、韓国人大学生のもつ日本人イメージが無知や誤解による誤った認識とは限らないこと、つまりある程度現実を反映していることを示唆している。

(2) 統計的分析からみた直接経験の影響

日本人イメージと直接経験の関連については、日本人との接触と滞日経験がそれぞれ日本人イメージ

にどう影響しているのかを検討した。その結果、日本人との接触は、接触の対象（日本語教師、友人）に関係なく「二面的、本心がわからない」「親切、やさしい」「迷惑をかけることを嫌う、配慮する」といったイメージの強化と、「ずるい、日和見主義」「歴史歪曲、過去を反省しない」といったイメージの弱化に寄与していることがわかった。そして、滞日経験は、「二面的、本心がわからない」「親切、やさしい」「迷惑をかけることを嫌う、配慮する」「規則遵守、原則重視」というイメージの形成と、「残忍、好戦的、暴力的」「歴史歪曲、過去を反省しない」というイメージの弱化に作用していることが示された。これらの結果より、直接経験がある人はない人より「二面的、本心がわからない」「親切、やさしい」「迷惑をかけることを嫌う、配慮する」といったイメージをもちやすく、「歴史歪曲、過去を反省しない」といったイメージをもちにくいことが判明した。

(3) 個人属性による日本人イメージの相違

日本人イメージと個人属性の関係については、性別、専攻、学年によるイメージの相違を検討した。性別については、女性は「二面的、本心がわからない」「親切、やさしい」「個性が強い、独特」といったイメージ、男性は「几帳面、繊細、緻密」「誠実、勤勉」といったイメージをもちやすいことが見出された。専攻については、日本語専攻は他専攻より「二面的、本心がわからない」「親切、やさしい」「気が小さい、消極的、静か」というイメージをもちやすく、「歴史歪曲、過去を反省しない」「創意に富む、独創的」「猟奇的、退廃的」「残忍、好戦的、暴力的」というイメージをもちにくいことが示された。学年については、高学年（３・４年生）は低学年（１・２年生）より「気が小さい、消極的、静か」「誠実、勤勉」といったイメージをもちやすく、「ずるい、日和見主義」「残忍、好戦的、暴力的」「創意に富む、独創的」といったイメージをもちにくいことがわかった。

第５章　日本人イメージの形成：日本語学習の影響

第５章では、日本人イメージ、対日情報源、イメージ全般の形成要因、直接経験について、学習者と非学習者の比較、学習者間（日本語能力別、日本語学習歴別）の比較を行い、学習者のもつ日本人イメージの特徴を明らかにした上で、その特徴を生み出す要因を検討した。

日本人イメージの比較からは、学習者が非学習者より「二面的、本心がわからない」「親切、やさしい」「気が小さい、消極的、静か」「迷惑をかけることを嫌う、配慮する」「規則遵守、原則重視」というイメージをもちやすいことが判明した。そのうち「二面的、本心がわからない」「気が小さい、消極的、静か」「規則遵守、原則重視」の３つについては、日本語能力の高い学習者が低い学習者よりもちやすいことも示された。一方、「ずるい、日和見主義」「利己的、計算的」「質素、節約する」「歴史歪曲、過去を反省しない」「残忍、好戦的、暴力的」というイメージは、学習者が非学習者より、また日本語能力の高い学習者が低い学習者よりもちにくいことが見出された。影響要因の分析（第４章）から、学習者がもちやすい５つのイメージは日本人の対人関係のあり方に関する内容で、学習者がもちにくい５つのイメージは国家イメージから派生した内容であることが推測できた。したがって、本研究の結果は、学習者、特に日本語能力の高い学習者が、日本人に対して「本音を示さず、深入りしない」といった対人関係のあり方に関する認識をもちやすく、「ずるがしこく、歴史意識が足りない」といった国家イメージから派生した認識をもちにくいことを示唆している。

対日情報源の比較からは、学習者は非学習者より、また日本語能力の高い学習者は低い学習者より直接経験（日本人との接触、滞日経験）と日本語および日本関連の授業への依存度が高く、韓国のテレビ報道と学校教育への依存度が低いことがわかった。イメージ全般の形成要因の比較からは、学習者は非学習者より、また日本語能力の高い学習者は低い学習者より直接経験の影響が大きく、韓国のテレビ報道

と学校教育からの影響が小さいことが示された。直接経験の比較からは、学習者は非学習者より、また日本語能力の高い学習者は低い学習者より直接経験をもつ人が多いことが判明した。予備的研究の結果(第２章)、影響要因の分析(第４章)、比較分析(第５章)から、学習者、特に日本語能力の高い学習者が日本人の対人関係のあり方に関する認識をもちやすい背景要因として日本語および日本関連の授業からの知識と日本人との対人コミュニケーション経験が見出された。また、国家イメージから派生した認識をもちにくい背景要因として対日情報源の多様性が導かれた。

以上の検討より、日本語学習が日本人イメージに与える影響の２つのあり方が示唆された。第１は、日本語の授業による直接的な影響である。日本語および日本関連の授業から獲得される知識が日本人の対人関係のあり方に関する認識につながることが示された。第２は、日本語の上達による間接的な影響である。日本語の上達が環境の変化(直接経験の増加、対日情報源の多様化)をもたらし、間接的に日本人イメージに影響を与えるプロセスが見受けられた。具体的には、１)日本語の上達が日本人との対人接触を促し、その接触経験から日本人の対人関係のあり方に関する認識が形成されること、２)日本語の上達に伴う対日情報源の多様化が対日情報源としての韓国のテレビ報道と学校教育への依存度を下げ、結果的に国家イメージから派生した認識の弱化につながることが推測できた。

第６章　日本人イメージの形成：因果モデル

第６章では、日本人イメージの形成に関する因果モデルを構築するために、まず第３章で明らかにした23カテゴリーのイメージをその形成要因に基づいて上位カテゴリーに再分類した。その後、ロジスティック回帰分析を用いて上位カテゴリーと有意な因果関係をもつ直接的・間接的要因を見出し、間接的要因から上位カテゴリーに至るまでのパスダイアグラムを作成した。

日本人イメージの上位カテゴリーとしては、「コミュニケーションの相手としてのイメージ」「日本の国民としてのイメージ」「物の作り手としてのイメージ」「自己表現に関するイメージ」の４つを導き出した。上位カテゴリーの出現頻度からは、韓国人大学生が日本人に対して日本の国民としてのイメージを抱きながらも、それ以上にコミュニケーションの相手としてのイメージをもっていることが明らかになった。これより、韓国人大学生は日本人の国民や集団成員としての特徴よりも独立した一個人としての特徴(特に対人関係のあり方)に注目していることが示された。また、韓国人大学生が日本人とコミュニケーションを行う際、コミュニケーションの相手としての既知のイメージが日本人との対人接触において先入観として作用しやすいことが示唆された。

ロジスティック回帰分析を通して、上位カテゴリーのイメージへの影響要因を総合的に検討した結果、韓国人大学生の日本人イメージの形成と弱化に関する以下のような経路を見出した。

(1)「コミュニケーションの相手としてのイメージ」の形成：３経路

①滞日経験者および日本に詳しい人、日本語および日本関連の授業、日本のドラマからの対日情報によって形成される。

②直接経験(日本人との接触、滞日経験)から生み出される。

③日本語の上達が対日情報源としての日本語の授業と日本のドラマへの依存度を高めたり、直接経験を促したりし、結果的にイメージの形成につながる。

(2)「日本の国民としてのイメージ」の形成と弱化：３経路

①韓国のテレビ放送と学校教育によって形成される。

②日本のドラマからの情報によって弱まる。

③日本語の上達が対日情報源としての日本のドラマへの依存度を上げる一方で、韓国のテレビと学校

教育への依存度を下げ、結果的にイメージの弱化につながる。

(3)「物の作り手としてのイメージ」の形成と弱化：３経路

①日本製品を使った経験から形成される。

②日本のファッション雑誌と韓国のテレビからの情報を通して弱まる。

③日本語の上達が対日情報源としての韓国のテレビへの依存度を下げ、結果的にイメージの形成につながる。

(4)「自己表現に関するイメージ」の形成：１経路

①ファッション雑誌と韓国にいる日本人の観察から形成される。

日本語学習が日本人イメージに直接的・間接的に影響を及ぼしていることは、因果モデルを通しても確認された。直接的な影響としては、日本語の授業が「コミュニケーションの相手としてのイメージ」の形成に寄与することが判明した。間接的な影響としては、日本語の上達が環境の変化（直接経験の増加、対日情報源の多様化）をもたらし、結果的に「コミュニケーションの相手としてのイメージ」の形成と「日本の国民としてのイメージ」の弱化に影響していることが明らかになった。これらの結果より、日本語学習（具体的には日本語の上達）に伴って日本人に対する日本の国民としての認識が弱まる一方で、コミュニケーションの相手としての認識が強まることが予測できた。

第７章　結論：日本人イメージの実態と形成メカニズム

本研究では、韓国人大学生の日本人イメージの実態とその形成メカニズムについて以下のようなことを明らかにした。

(1) 日本人イメージの内容が具体的でかつ複合的である。

回答者の自由記述から見出した23カテゴリーのイメージは、非常に細分化しており、相反する内容を内包していた。

(2) 多様なレベルの対日情報と直接的な経験が日本人イメージを形成している。

韓国のテレビと学校教育からの情報のみならず、日本のメディア（ドラマやアニメなど）からの生の情報と直接経験（日本人との接触、滞日経験）も日本人イメージの形成に大いに寄与していた。

(3) 日本語学習は日本人イメージの形成に直接的・間接的に影響を及ぼしている。

日本人イメージの形成における日本語学習の影響には、日本語の授業による直接的な影響と、日本語の上達に伴う環境の変化（直接経験の増加、対日情報源の多様化）がもたらす間接的な影響があることが判明した。

(4) 日本の国民としての認識よりもコミュニケーションの相手としての認識が強く、そのような認識には日本語学習が大きく影響している。

日本人に対して日本の国民としてのイメージを抱きながらも、それ以上にコミュニケーションの相手としてのイメージをもっていた。また、ロジスティック回帰分析では、日本語学習がコミュニケーションの相手としてのイメージの形成と、日本の国民としてのイメージの弱化を促していることが明らかにされた。

本研究の結果より、韓国人大学生がもっている日本人に対するコミュニケーションの相手としての認識が、日本人との対人接触において先入観として作用しやすいことが示唆された。滞日経験者、日本のメディア（ドラマ）、直接経験を通して形成されるコミュニケーションの相手としての認識は、ある程度現実を反映しているものといえる。よって、そのような認識は、日本人とコミュニケーションを行う際

に相手に対する背景知識として働き、相手の行動を理解する手助けとなることが期待できる。しかし、一方では、信頼性の高い情報として過度に一般化され、相手を判断する際に初めから適用されやすく、コミュニケーションの相手に対する正しい理解を妨げる原因ともなりうる。

韓国人の日本人イメージの内容と形成メカニズムを具体的に記述した本研究の結果は、韓国人側には日本人との対人接触において先入観として作用しやすいイメージの実体を自覚するきっかけを、日本人側には韓国人との対人接触において生じうる認識のギャップに関する情報を提供し、両者の対人コミュニケーションにおける相互理解の促進に貢献できると思われる。

論文審査結果の要旨

本論文は、韓国人大学生の抱く日本人イメージの実態とその形成メカニズムについて質的調査および量的調査を通して実証的に明らかにした研究である。論文は７章から構成される。第１章序論で問題の所在と先行研究を示し、第２章では予備的研究について説明し、第３章から第６章で本調査の結果と考察をまとめ、第７章で総合的な結論を述べる。

第１章ではまず、韓日間の人的交流が急増している現状を踏まえて、集団としての日本人対する韓国人のイメージが日本人との対人コミュニケーションに与える影響に注目し、韓国人大学生のイメージの実態とその形成メカニズムを検討する必要性について述べている。また、本研究の目的としては、１）日本人イメージの詳細な記述、２）日本人イメージの形成メカニズムの分析、３）日本語学習が日本人イメージに与える影響の検討を掲げている。さらに、本研究が従来の外国人イメージ研究と異なる特徴は、１）単に好感度をみるのではなく、イメージの具体的な内容と各イメージの形成過程を検討の対象にしている、２）質的調査（面接法）と量的調査（質問紙法）を用いて日本人イメージの全体像の正確で多面的な把握を目指している、３）集団としての日本人イメージが日本人との対人コミュニケーションに及ぼす否定的な影響に注目している、の３点であるとしている。

第２章では、予備的研究１（質問紙調査）と予備的研究２（面接調査）の内容と以下の主な成果３点を説明している。１）日本人イメージの内容：因子分析を用いてイメージの６つの構成因子（利己的、配慮的、集団的、個性的など）を抽出し、一方ではPAC分析の自由連想およびインフォーマントによる解釈を用いて６つのイメージ（独自的、二面的、性に開放的など）を見いだした。２）日本人イメージに影響を与える要因：重回帰分析の結果から韓国マスメディア、直接経験（日本人との接触、滞日経験）、統合的志向（日本人や日本文化への関心）、性別の４つの影響要因を求めた。３）日本語学習者と非学習者のもつ日本人イメージを比較し、日本語学習の影響には日本語の授業による直接的影響や日本語の上達に伴う環境の変化（日本人との接触増加、対日情報源の多様化）による間接的影響が存在する可能性を示した。

第３章以下では、予備的研究の成果を生かして行った本調査の結果をまとめている。本調査は韓国の３地域の大学生を対象に質問紙法による調査を実施した。有効回答者は527名であった。

第３章では、自由記述の回答について内容分析を行い、日本人イメージ23カテゴリーを導きだし、各イメージの意味と出現頻度を検討した。イメージの内容が非常に細分化され、相反する内容が出現していたことから、韓国人大学生は日本人に対してかなり具体的で複合的なイメージを抱いていることが明らかになった。このことは、イメージの全体像が肯定的か否定的かというような単純な分析の枠組みでは捉えきれないことを示唆している。出現頻度から、「二面的」「親切」「開放的」「几帳面」「礼儀正しい」「個

人主義的」「個性が強い」などのイメージが広く共有されていることが判明した。また、過去の類似の調査結果と比較することで、日本人に対する認識は、国民としてのものから個々のコミュニケーションの相手としての認識へと変化しつつあることも明らかにしている。

第４章では、日本人イメージ形成への影響要因について、内容分析と統計的分析を用いて検討されている。その結果、韓国人大学生の日本人イメージ全般の形成要因は、既存の情報源（韓国のテレビ報道、高校までの学校教育、日本語・日本関連の授業）と生の情報を提供する情報源（アニメやドラマなどの日本の大衆文化、友人としての日本人との接触や滞日経験などの直接経験）に分類された。特に後者がイメージ形成に大きく寄与しており、日本人イメージが無知や誤解などの誤った認識とは限らず、ある程度現実的なものであることが示唆された。

第５章では、日本人イメージの形成に日本語学習が与える影響ついて検討している。その結果、学習者、特に日本語能力の高い学習者は日本人に対して、１）「本音を示さず、深入りしない」といった対人関係のあり方に関するイメージをもちやすく、「ずるがしこく、歴史認識が足りない」といった国家イメージから派生したイメージをもちにくい、２）対日情報源が多様で、直接経験と日本語・日本関連の授業への依存度が高く、韓国のテレビ報道や学校教育への依存度が低い、３）直接経験が多く、その影響も大きいことが判明した。

第６章では、日本人イメージの形成に関する因果モデルの構築を目的としている。まず、第３章で明らかにした23カテゴリーを「コミュニケーションの相手」「日本の国民」「物の作り手」「自己表現」の４つのイメージに再分類した。これら４つの出現頻度の分析結果から、韓国人大学生は日本人に対して日本の国民としてのイメージを抱く以上に、コミュニケーションの相手としてのイメージをもっていることが判明した。続いて、ロジスティック回帰分析を用いて４つのイメージと有意な因果関係をもつ直接的・間接的要因を見いだし、日本人イメージの形成と弱化に関するパスダイアグラムを作成した。この分析結果から、日本語学習がコミュニケーションの相手としてのイメージの形成を促進し、日本国民としてのイメージの弱化を促していることが明らかにされた。

第７章では、韓国人大学生のもつ日本人イメージの実態とその形成メカニズムについて、次のような結論をまとめている。１）日本人イメージの内容は単純ではなく、具体的かつ複合的であること、２）多様なレベルの対日情報と直接経験がイメージ形成に影響していること、３）日本語学習は日本人イメージの形成に、日本語の授業によって直接的な影響を与え、日本語の上達に伴う環境の変化が間接的な影響をもたらしていること、４）韓国人大学生は日本の国民としてのイメージよりもコミュニケーションの相手としてのイメージが強く、それには日本語学習が大きく影響していること。

今後の課題としては、今回は実現できなかった日本人イメージの構造を明らかにすること、縦断的研究を行うこと、日本人イメージと個人属性との関連性を明らかにすること、研究対象者を韓国人一般・韓国以外の国に拡大して、外国人イメージの形成についてより普遍的な知見を求めることである。また、日本人のもつ韓国人イメージについての調査結果を本研究と比較検討することも必要である。

以上のような課題はあるものの、新たな研究アプローチを用いて、対人コミュニケーションという観点から日本人イメージについて論者が行った詳細な分析の結果は、韓国人の対日イメージにおける近年の変化を的確に捉えたもので、その成果は日本語教育学分野のみならず、異文化交流を扱う社会科学の諸分野にも寄与するところが大きい。よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。